

『ソクラテスの弁明』より

それではもう一度はじめから、告発がいかなるものであるのかを検討し直すこととしましょう。

「ソクラテスは、地下ならびに天空の事物を探索するとともに、劣った議論を優勢にし、またそれと同じことを他の者たちにも教えるなど余計なことを行い、不正を犯している。」

すなわち、その主張によれば、ソクラテスは若者を墮落させ、また国家が崇めるところの神々を崇めず別の新奇な神格を崇めることによって不正を犯しているということです。

実は私がその知者という名声を得るにいたったのは、アテナイ人諸君、ある種の知恵による以外の何ものによってもないのです。それではそれはいったい、どのような知恵なのでしょう。おそらくそれこそは、人間が持つにふさわしい知恵なのです。そして実際、その知恵にかけては、私は知者であるらしいのです。

そして神は私を一つの例として用いるために、このソクラテスを指して、私の名前を引き合いに出されているように思われるのですが、それはあたかもつぎのように言おうとされているかのようです。「人間たちよ、ちょうどソクラテスのように、知恵に関しては本当のところ自分は何の価値もない者なのだ」ということを悟った者、まさにその者こそがおもえたちの中で最も知恵のある者なのだ」と。そんなわけで私は今なお、あちこち歩き回っては、それがこの市の者であつても外国の者であつても、だれか知恵があると私が思う者があれば、神に従って探し出しては問いただしているわけなのです。

P.28

P.19

P.14

P.31

《参考》

論語 「為政第2」 17.

原文 子曰、由、誨、女知之乎。知之為知之、不知為不知。是知也。
書下文 子曰く、由よ、汝に之を知ることを誨えんか（おしえんか）。

これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり。

現代語訳 孔子先生はおっしゃいました。

由よ、お前に「知る」ということを教えてあげよう。

知っていることと知らないことをきちんと分ける。

これが知ることだよ。

中途半端のままは、知らないのと同じだよ。

『クリントン』より

ソクラテス それはそのとおりだ。だがねきみ、ぼくたちが今論じてきた言論そのものは、依然として前と同じままだとぼくには思われるのだよ。ではもう一つ、この言論についても考えてみてくれないか。すなわち、いちばん大事にしなければならぬのは生きることでなく、よく生きることだ、という言論はどうだろう。これは依然として動かないだろうか、それともどうだろうか。

クリントン いや、動かないよ。

ソクラテス では、「よく」というのと「立派に」というのと「正義しく」というのは同じことである、というのはどうかね。これは動くか、それとも動かないかね。

クリントン 動かない。

ソクラテス すると、今同意されたことどもからすれば、ぼくたちが考慮しなければならぬのは、このことだ。すなわち、アテナイの人々が解き放たないのに、ぼくがここから出てゆこうとすることは、正義しいか、それとも正義しくないか、ということだ。そして、もしそれが正義しいと分かったら、やることにしよう。だが、そうでないとしたら、やめることにしよう。

言っても無駄だろうと思う。しかしそれでも、もしきみがこれに打ち勝つことができると言うなら、言ってくれたまえ。

クリントン いや、ソクラテス、言うことはない。

ソクラテス それなら、クリントン、もうこれでいいことにしよう。そして、このままこのとおりしよう。それが神のお導きなのだから。

『クリントン』 解題

この作品は短だけでなく、話の筋もきわめて単純である。裁判で死刑の判決を受け、牢獄に繋がれているソクラテスのところへ、ある朝早く、親しい友達のクリントンがやってくる。かれは、ソクラテスを脱獄させて国外へ亡命させるといふ、かねてからの救出計画にソクラテスが同意するように最後の説得を試みるのだが、逆にソクラテスによって、その計画を思いとどまるように説得されてしまう。話の筋はこれだけである。また、事件そのものも、計画倒れに終わった些細な事件にすぎず、いわばソクラテスの裁判と死刑との間にはさまった逸話とも言えるべきもので、取り立てて問題にするほどの意味はなさそうに見える。しかしその一方で、この小さな作品は、「ただ生きるのではなく、よく生きることが大切である」というソクラテスの言葉を有名にし、「悪法も法なりとして、従容として毒杯を仰いだ」というソクラテス像を確立した点で、重要な作品と見なされてきたのも事実である。

P.174

P.138

P.137



ソクラテスの弁明・クリントン

三嶋輝夫・田中享英 訳
プラトン

バチカン教皇庁「アテナイの学堂」ラファエロ画
プラトン「真理は天にある（観念的なものである）」
アリストテレス「地（現実世界）にこそ真理がある」

※プラトンはソクラテスの弟子。ソクラテスは著書を残していないが、その足跡は対話を記録したプラトンの著書で確認できる。
※アリストテレスはプラトンの弟子、ソクラテスの孫弟子。「万学の祖」と言われる哲学者（博学者）。自然科学を確立した。

『ソクラテスの弁明』解題

プラトンは前四二七年、アテナイに生まれ、前三四七年に没している。ソクラテスを不敬神の罪に問う (asphe tesbeias) この裁判が行われたのは前三九九年であり、プラトンは当時、二十八歳の青年だったことになる。

本篇の執筆時期について正確なことは分らないが、いずれにせよ、プラトンが著作活動を開始して間もない時期、前三九〇年代後半とする見解が一般的である。

つぎに、ソクラテスにおける不知の自覚と、知の関わりについて考えてみたい。

まずアーウインは、ソクラテスが再三にわたって徳——これこそは「美にして善なる事柄」の最たるものである——についての知を否認していることから、その否認を真剣なものとするべきことを指摘する。その上で彼は、ソクラテス自身は知識と信念をことさらに区別していないことを認めつつも、その発言からして事実上、「厳密な正当化」を要求する知識と、そのような正当化は欠いているものの信ずるに足る「積極的な信念」もしくは「知識を欠いた正しい信念」とを区別しているものと見て、ソクラテスが前者についてはそれを所有していることを否定しつつも、後者については肯定していると見て (Irwin, p.39f.)。

つぎにワラストスは、

またレッシュャーは

さらにブリックハウス&スミスは、

このように解釈者たちもこの難問を解くことに悪戦苦闘しているのであるが、訳者には、最初のアーウイン説が単純ではあるものの、最も説得力があるように思われる。